読み書き、そろばん、ナヴィゲーション

今年に入ってから５本のテレビ番組、５本の新聞・雑誌に記事・コメントを寄せた。全ては方向感覚に関することだ。一昨年のベストセラー「地図が読めない女…」の影響もあるが、方向感覚はマスコミの中でも比較的ポピュラーな話題の一つである。これは空間能力や目的地に着くナヴィゲーションに、世間の人々が多いに注目していることの証でもある。

昨年１月に山と渓谷社から発行した拙著「道迷い遭難を防ぐ最新読図術」は、１年の間に６刷を重ねた。前後して、地図読みに関する類書が出たが、地図読み・ナヴィゲーション技術はアウトドアの世界ではもっとも求められながらも、なおざりにされてきた技術の一つと言える。ＴＶ番組で方向音痴の人に地図読みを教える機会があった。その時彼女は半日で整置やサムリーディング技術をものにした後こういった。「こんな地図の使い方、学校では教えてくれませんでした。絶対教えるべきだと思います」。

アウトドアの世界でも

同じようなニーズは、アウトドアの世界にもある。最近ポピュラーになりつつあるアドベンチャーレースのトレーニングキャンプにナヴィゲーション部門の講師として参加した。アドベンチャーレースは、ＭＴＢやカヤックなどで移動して目的地を目指す耐久レースだが、基本はナヴィゲーションであり、チームは地図を読みながらゴールを目指さなければならない。そのアドベンチャーレーサーにとって、オリエンテーリングのナヴィゲーション技術の体系は、カーナヴィにも匹敵する、緻密で精度の高いものとして映ったようである。その後も何人かのアドベンチャーレーサーたちが、ナショナルチームの合宿に来て、ナヴィゲーション技術を習得している。

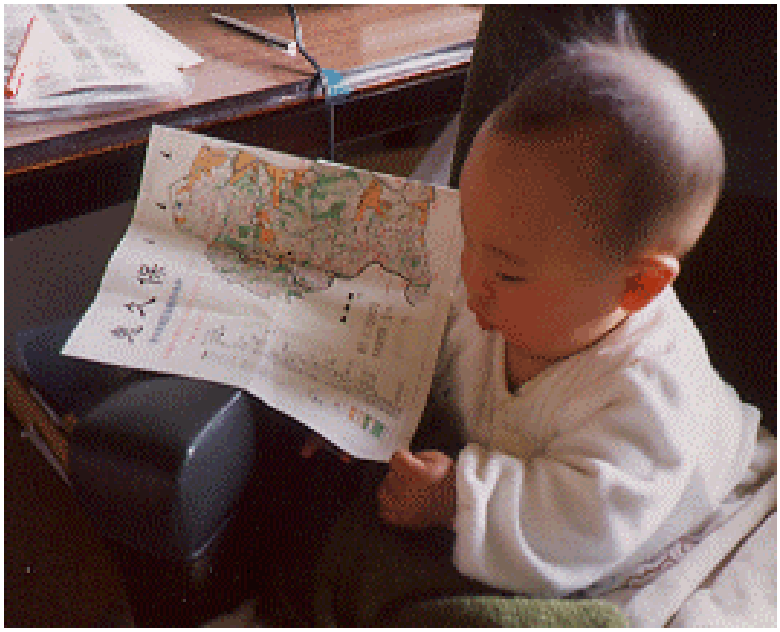
地図という媒体

指摘するまでもなく、目的地を目指すナヴィゲーションという行為は、人間の生活になくてはならないものだし、そのスキルも本来万人に求められるものだ。またその中心的な道具である地図も、言語と並ぶ人間の代表的な記号体系である。言語に関する研究は多いが、読図の背後にある人間の能力に関する研究は、認知心理学はおろか、地理学でも十分ではない。「図は自然に読めるようになるもの」、そう思われているかもしれないが、現実はそうではない。地図を読み、目的地に到達するには多くのスキルが関係している。私のこの１年半ほどの経験は、そのいずれに関しても、オリエンテーリングには、他の世界に胸を張れる知識と技術の蓄積があることを教えてくれている。

教育の世界でも注目されるナヴィゲーション

２０世紀が読み書き、そろばんという明確な手順に基づくスキルの時代だとすれば、２１世紀は、目的地はあってもそこへのルートは多様な時代である。時には未知であるそのルートを目的地に向かう能力が求められている。現在の学校教育では、これを「生きる力」と総称し、その力の育成にエネルギーを注いでいる。与えられたデータをうのみにするのではなく、それを取捨選択すること、吟味して使うこと、先を予測して危機に備えること、現代の学校教育が求めている能力は、全て私たちがナヴィゲーションの中で親しんできた能力である。

この資産を生かし、私たち自身が楽しむだけでなく、社会にいかに貢献するか。それが今のオリエンティアに求められた使命といえるだろう。



▲全ての人に地図読みとナヴィゲーションの技術を！？